

港北ニュータウンに横浜市歴史博物館、環濠部落と茅ヶ崎城を訪ねる

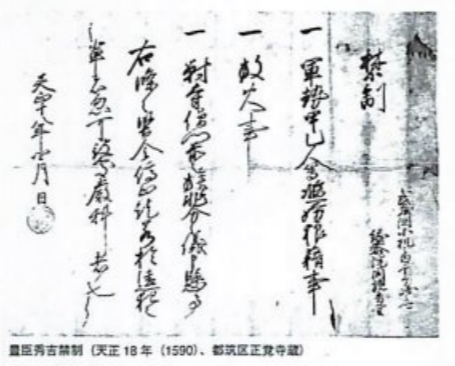
山岸弘明

主要スケジュール

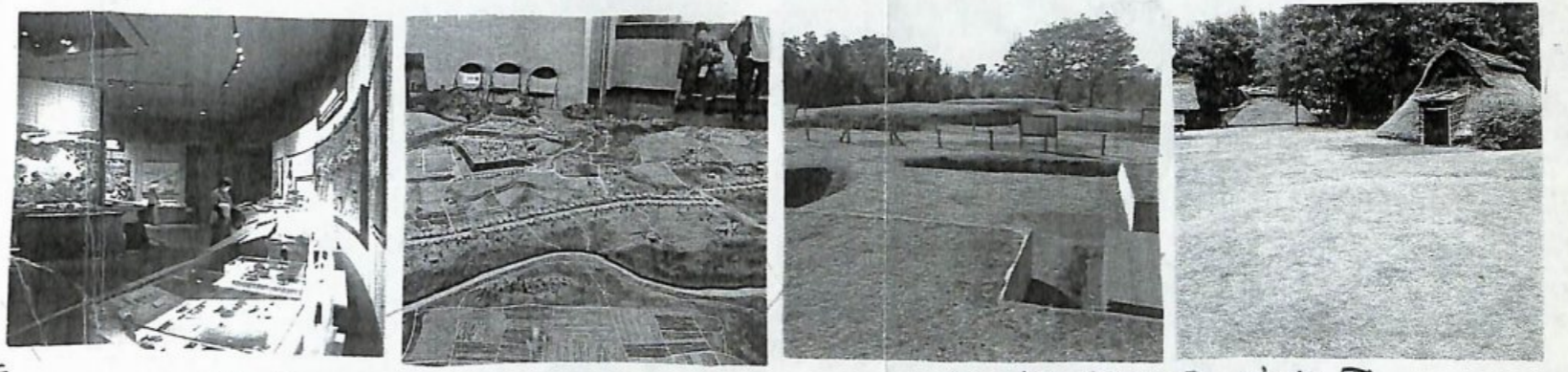
- 10時00分 センター北駅集合、開会式
- 10時30分～11時15分 横浜市歴史博物館
- 11時15分～12時00分 大塚、歳勝土遺跡公園
- 12時00分～13時00分 昼食（遺跡公園工房）
- 13時15分～15時00分 茅ヶ崎城
- 16時00分 センター南駅解散

茅ヶ崎城の概要

所在地＝横浜市都筑区茅ヶ崎区東2茅ヶ崎城址公園
 立地＝鶴見川支流早瀬川沿い、丘陵先端部に立地、周囲を低湿地に囲まれた独立丘
 縄張り＝梯郭式?平山城(丘城)、向き＝北または東北、早瀬川側?の攻撃を意識か
 築城＝不詳、永享年間?山内または扇ヶ谷上杉氏、再築＝戦国中期北条氏
 扇ヶ谷氏は相模守護職、山内氏は武蔵守護職
 本城＝上杉氏小机城支城、小田原北条氏小机城支城
 小机支城網＝荏田城、川名城、佐江戸城、篠原(金子)城、大豆戸(安山)城
 廃城＝文明10年、天正18年
 遺構＝空堀、掘り切り、土橋、土塁(一部2重)、虎口、建物跡



明年前半の行事スケジュール＝速報
 1月26日 新年のつどい(現在の申し込み59名)
 2月12日 練馬城、石神井城
 3月13日 春季研修会
 4月12日 日帰りバス＝駿府城、興国寺城、小島陣屋
 5月23日 行徳、船橋サッポロビール工場見学
 6月5日 日帰りバス＝大田金山城、箕輪城
 変更する場合がありますのでご注意ください
 正式発表は次回1月26日発行の「会報」第46号です



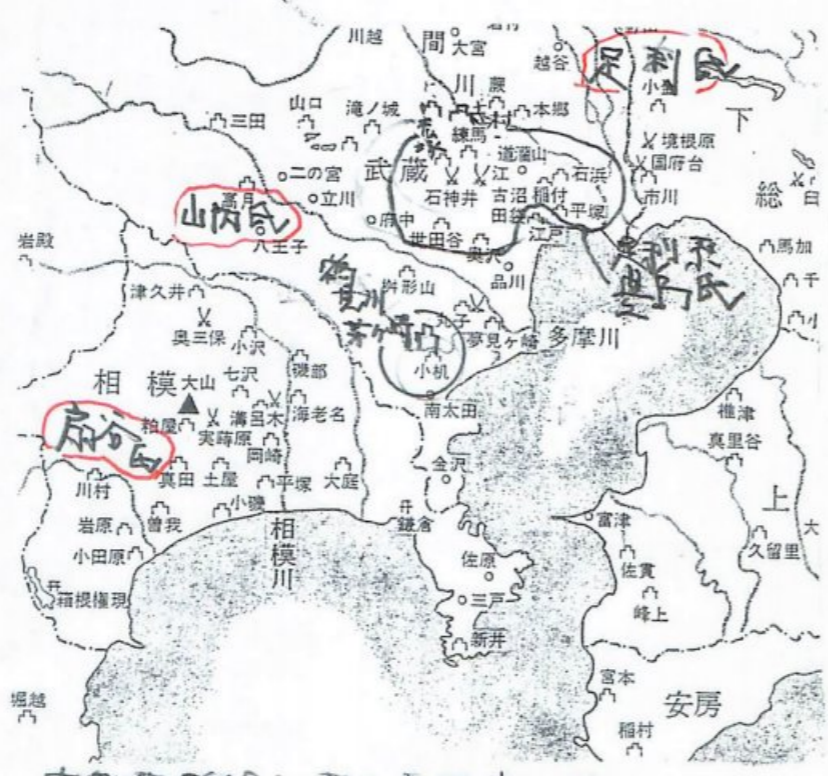
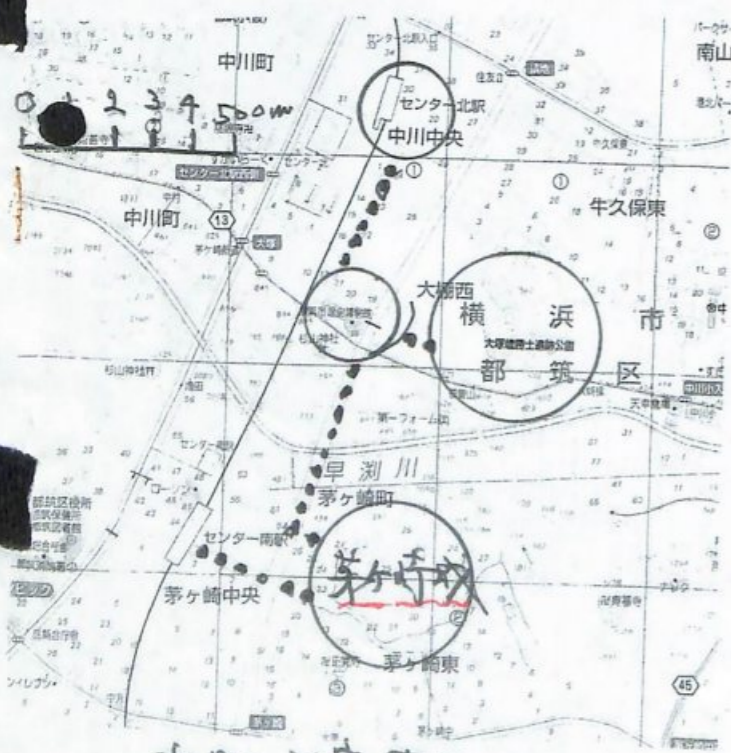
横浜歴史博物館

大塚歳勝土遺跡公園

関東管領上杉家支城から後北条家臣団小机衆の支城へ

城の歴史＝小机城とともに歩んだ茅ヶ崎城

- ①永享年間(15世紀はじめ)関東管領山内上杉氏または一族の扇ヶ谷上杉氏が小机城支城として築城、小机城主は山内上杉氏の家宰(家老)長尾氏が勤めた。
 *小机城は南方4km、横浜市港北区小机町(横浜線小机駅)にある。平成7年、16年の2回、茅ヶ崎城は平成16年に次ぐ2度目の見学となる
- ②鎌倉府の内乱に端を発した関東動乱時代の文明10年(1478)、父職の相続争いで、太田道灌と対立した長尾景春が反乱を起したが、応援した豊島一族とともに道灌に制圧された。
 *豊島一族(豊島、葛西、滝野川、板橋、石神井氏ら)は現在の西武池袋線、板橋、王子、京成線にかけての都心部一帯に勢力持ったが、関東動乱の時古河公方方に与し、扇ヶ谷上杉系の太田道灌に攻められて一部が小机城を最後の拠点としたが敗れた。
- ③新家宰長尾氏は成田氏を小机城代として派遣、茅ヶ崎城は一時廃城となった。
- ④戦国中期、後北条早雲(伊勢新九郎)が小田原城奪取を皮切りに関東を制覇、小机城もその勢力下に組み込まれ茅ヶ崎城が再興された。後北条時代の小机城主は2代北条氏綱弟幻庵の子北条三郎で、氏亮、氏信、氏光と続いた。城主は普段小田原に居住したので現地には城代が置かれた。初代は笠原信為で歴代子孫が勤めた。小机四人衆が支城領全域を管理し、小机衆と呼ばれた28人の武士団が知行地として軍団を組織した。小机支城網は榎の下城、篠原城、荏田城など、茅ヶ崎城主は小机衆の座間氏、深沢備後守が勤めた。
 *再興された茅ヶ崎城は城域も大きく拡大整備された。主郭は3つに分けられ北郭や東下郭、東北郭が築かれた。土塁や空堀、切り岸、腰曲輪や虎口が強化された
- ⑤天正18年豊臣秀吉の「小田原征伐」で小机城とその支城は無傷のままごとく落城という。詳細は伝わらないが兵力すべてを小田原に集結しており不戦開城が考えられる。
- ⑥徳川家康の関東に入府で廃城、江戸時代は入り会い地となり、城山(じょうやま)の名前で今日に保存された。
- ⑦平成2年から発掘調査、平成20年茅ヶ崎城址公園として一般開放された。



本日のご案内コース

関東戦国期はじめ南関東の城

史蹟看板で訪ねる関東管領上杉系「中世丘城の教科書」

関東管領家から後北条へ、茅ヶ崎城を歩く

1) センター北駅から徒歩 15 分 * 外堀川の大橋りょうを越え茅ヶ崎城をめざす

- ①歳勝土遺跡公園での昼食後茅ヶ崎城まで歩く。
- ②早淵川は外堀、茅ヶ崎城の全容、立地を遠望しながらおよそ 15 分で現地へ。

2) 西域の守り堀切りと観音堂

- ①城山西側から主郭をめざす。短いが多少急坂。現在正面唯一の登城道だが、大手、からめ手の別などは不詳。
- ②ほどなく観音堂へ。城の守護神で境内の手水鉢は「武蔵風土記」の茅ヶ崎城主「清和源氏多田山城守行綱守り本尊、正観世音菩薩御宝前」を刻む。
- ③掘り切り（空堀+堅堀）=西側の守り。堀底道で攻撃ルートでもある。城山下根小屋に通じ、その先は低湿地(たんぼ)になっていた。根小屋との連絡道は東郭虎口で、ほかに東北郭を迂回ルートがあったと考えられる。掘り切り空堀をしばらく進むと急坂となる。主郭側は切り岸による急ガケで城山から弓矢、鉄砲を射掛けた。

3) 北郭前で城の全体像を確認 * 城址公園入り口

- ①城正面の守り。外堀早淵川を遠望、前面に低湿地(たんぼ)、「調査報告書」の一部深田は水濼跡であろうか。
- ②北郭虎口(通過=最後に戻る)
- ③急ガケ、腰曲輪(平場)、東北郭
- ④堀底道、公園入り口、虎口風作り
- ⑤東郭腰曲輪、東郭土橋、東下郭 **2重土塁(本)庭造**
- ⑥なわばり図、指定史跡看板城の概要と現在地などを確認。

* 市教育委員会大看板=茅ヶ崎城全景図、主要年表、関係周辺地図

茅ヶ崎城址は「空堀」「郭」「土塁」などが良好な状態で残る、貴重な中世城郭です。早淵川にのぞむ自然の丘を利用して築城されています。茅ヶ崎城は14世紀末~15世紀前半に築城されたと推定され、15世紀後半にもっとも大きな構えとなります。16世紀中ごろには二重土塁とその間に空堀が設けられました。築城にはそれぞれの時期に相模、南武蔵を支配した上杉氏や後北条氏が関与していたと推定されます。16世紀末までには城としての役割は終わります。江戸時代には徳川氏の領地となり村の入会地として利用され、城山の地名とともに今日まで保存されてきたのです。貴重な歴史資産なのです。

* 市教育委員会史跡看板=横浜市指定史蹟、茅ヶ崎城址

茅ヶ崎城址は江戸時代初期に編纂された「新編武蔵風土記稿」では、平安時代末期の摂津守頼盛の子、多田太郎が城主と伝え、多田山城守屋跡とも呼ばれていました。平成2年から平成20年までの7次にわたる発掘調査の結果、空堀や土塁などの遺構が良好な形で現存していることが明らかになりました。発見された陶磁器、かわらけなどの遺物から14世紀末から15世紀前半に築城され、16世紀にかけて使用されていたことがわかりました。城を築いた者などは不明ですが城は東西350m、南北220mの範囲で6つの郭(西、中、北、東、東下、東北)と根小屋などから構成されています。築城当時の姿を良好な形で残す市域唯一の貴重な遺跡として公園部分が横浜市指定史跡に指定されました。



外堀と早淵川



西側登城口



北郭の城址公園入り口



← 新編武蔵風土記稿

4) 後北条時代に築かれた北郭(日本城郭大系は第4郭とする)

- ①主郭尾根から一段低い付属郭、後北条氏時代に築かれた2の丸相当の曲輪。
- ②自然の地形を活用、削平された40×70mほどの曲輪。周囲を土塁と空堀が囲む。一段高い西側土塁はその先北虎口やぐら台か、北郭は兵の集結、点呼などに使われたと考えられる。
- ③井戸跡
- ④土塁=中郭、西郭隅から北虎口の守りを観察

* 市教育委員会史跡看板=井戸、発掘調査図

戦となれば長期に立てこもることもあった城にとって建築する土地を決める際に水が湧く場所がどうかも重要な要素でした。井戸は重要な設備として城内に複数作られ、警護も厳重でした。茅ヶ崎城址では北郭で上端の直径4m、深さ5mほどの井戸が見つかっています。この井戸の湧水量は極めて多く(中略)井戸の周辺からは使用する際に横板や梁を渡して水を汲む簡単な施設が建設されたと思われる遺構が見つかっています。

⑤北郭土橋

* 市教育委員会史跡看板=北郭土橋、土橋、発掘調査図

北堀の中央西部を掘残したもので、上幅は2.9m、下幅は4.5m以上あります。横断面は幅広の大径で東壁は60度、西壁は70度になっていました。土橋に続いて幅2m弱の土を固めた道路が郭内にのびています。この道ははじまる両側には対になる柱穴があり、木戸の痕跡と考えられます。

* 市教育委員会史跡看板=土橋

土橋は「虎口」と呼ばれる。城の出入りに設けられる施設です。一般的には城周辺の空堀の一部を掘り残して作られます。茅ヶ崎城では北郭土橋と西郭土橋のように空堀を掘り残して作られたものと、中郭土橋のように東郭と結ぶために空堀の一部を埋めて作られたものがあります。北郭土橋と西郭土橋は、早淵川沿いの道に向かって設けられています。



発掘調査の様子(財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財調査提供)



5) 城主が居住した本丸相当の中郭(第2郭)

- ①城の中心となる曲輪。幅およそ70、長さ30、50mほどの台形で周囲を高い土塁と空堀が回る。南側土塁が厚く南西隅はやぐら台跡、井楼やぐらの物見台が築かれた。
- ②上杉氏時代は東郭、西郭と一体の主郭であったが、後北条氏時代に防御上3つの曲輪に分けたと考えられる。近世の本丸に相当、城主とその家族居所と考えられるが発掘調査で確認されなかった。しかし南東部分からはほったて柱穴と焼けた壁土かけらなどを検出、倉庫地区とみられる。
- ③高いところは登れ、土塁上を半周、中郭を俯瞰、2重土塁、やぐら台跡。後北条流2重土塁=一重め土塁、空堀、2重め土塁。前回の山中城と比較



東下郭



北郭



中郭出入口跡



中郭



中郭出塁台跡



中郭中尺郭

5
*市教育委員会史蹟看板=発掘調査のあらまし、調査図、城の立地と歴史的環境

茅ヶ崎城は早瀬川中流右岸の三角山から東に連なる丘陵の先端部に築かれた丘城です。標高は28~35mあり、最高所は中郭南西隅の土塁上でおよそ40mあります。当地域は武蔵国南部にあたり、関東の政治の中心地である鎌倉に隣接しています。茅ヶ崎城の近くには関東各地と鎌倉を結ぶ鎌倉道のうち「中の道」が通っていたと考えられており、東側には後の中原街道、西側には矢倉沢街道(大山路)が通じています。また早瀬川沿いの道は神奈川湊と武蔵国府を結ぶルートの一つでした。茅ヶ崎城はこのような交通の要衝の地に自然の地形を巧みに利用して築かれていたのです。

*市教育委員会史蹟看板=茅ヶ崎城の郭

茅ヶ崎城の場合石垣はみられず、堀と土塁によって区画されています。「東郭」「中郭」「西郭」「北郭」の4つが主要な郭です。「東郭」が主郭に相当すると考えられます。東西50m南北20mの不整長方形をしており、頂部の平坦面が「中郭」より3mほど高い位置にあります。建物などの痕跡はまだ確認されていませんが、この郭は戦闘時における最後の拠点となる場所であったと推定されます。茅ヶ崎城では「東郭」に接する一段低い位置に「腰郭」がみられます。その北西には東北郭がありますが、この郭の詳細は明らかではありません。

*市教育委員会史蹟看板=倉庫の発見

中郭の住居域と見られた部分の内容を明らかにするため、郭内南東部の発掘調査を行ないました。その結果、全面に多数の柱穴や土坑が分布し、東西、南北に軸を持つ掘り立て柱に建物が並び、南土塁との間を塀で区切っていることが明らかになりました。建物1~3内の土坑は陶器の埋納坑と推定され、これらの建物は倉庫と考えられます。また、住居施設としての建物跡はこれまでのところ確認されていません。

*市教育委員会史蹟看板=土塁

堀を掘った土を盛って築き上げた堤のことで敵を阻止し反撃する際の足がかりとする役割がありました。したがって規模の大きな土塁ほど防御効果が大きいです。堀と土塁の構造は一体となって行なわれ、表土を削り、土盛りをする部分は山の斜面を平に削って帯状のテラスを作りました。ここに黒土を置いて叩きしめ、盛り土が崩れないように基礎を作りました。このテラスからやや下がった場所を等高線に沿いに掘り切り、排土を斜面下方に水平に積んでいき土塁としました。本城址の主な土塁は堀底から7mから8m、郭内ら高さ2.5m以上、基底部の幅は7mから8mあったと推定されます。土塁の側面には「武者走り」とか「犬走り」とよばれる施設が作られました。これは連絡用の通路としての役割とともに土塁を越えようとする敵を上方から攻撃するための足場としての役割もありました。

*市教育委員会史蹟看板=郭

堀や土塁、石垣などで区画を郭といい、「曲輪」とも表記されます。江戸時代には「丸」ともよばれました。城は郭をいくつも作り出すことで成り立っています。城の中心となる郭は「主郭」または「本曲輪」とよばれ、江戸時代には「本丸」とよばれました。または戦国時代の丘城は自然の地形を巧みに利用して築かれています。主要な郭の外側や丘陵の中腹にもさまざまな区画が見られます。主要な郭をめぐる堀の外側を取り囲むように作られる「帯郭」、主要な郭の外側の一部に作られる「腰郭」などがその代表といえます。

6) 上杉氏時代の古い形を残す東郭(ア3ア)

- ①中郭から空堀堀底道を東郭に移動。
- ②2重土塁の真ん中の空堀。後北条流、前回の山中城と比較。
- ③根小屋、腰曲輪

*市教育委員会史蹟看板=根小屋

根小屋とは城下町というものがまだない時代の、城主や重臣たちの居住地区のことです。この時代の城主は普段は本丸や主郭に居住せず、郭の麓に作られた根小屋で生活し、いざ戦いとなったときにのみ、城に籠りました。茅ヶ崎城址では南、東の崖面裾に幅11~20m、東西600mにおよぶ平場が展開しており、14世紀から15世紀に蔵骨器や板碑などからなる墓地をとまなう屋敷があったと考えられています。

*市教育委員会史蹟看板=腰郭

腰郭は東西60mの帯状をなし、東北部は約200mのむ平場となっています。東側は急なげで北側には幅10mほどの北堀があり、東北郭との間を遮断しています。この北堀の内側には土塁が伸びています。この郭は武者たまりとしての役割があったと推定されます。

④東郭虎口=根小屋との連絡通路。最重点守りの拠点

⑤中郭土橋=東郭と中郭を結ぶ土橋。好天なら登って降りる。



6
⑥東郭=城の最高所に立地、物見台を兼ねる伝えの城か、のろし網の拠点。

茅ヶ崎城の曲輪は計画的に縄張りされた後北条時代の角型が多いが、東郭の先端は丸い地形を残している。上杉氏時代に遡る古い縄張りを物語っている。室町中期、戦国時代前の詰めの城(丘城)は曲輪も少なく単純明快、防御設備も小規模な土塁、空堀程度であった。切り岸による急ガケや腰曲輪の多用、大型空堀、掘り切り、帯曲輪などの手法は戦国後期のものである。

*市教育委員会史蹟看板=東郭

東郭は城の中でもっとも高い位置にあり、「中原街道」や「矢倉沢街道」の街道を見わたらせるほど見晴らしがよいため物見台の役割をもっていました。また、城郭の中でも高所にあるため、戦いの際に最後に逃げ込んで籠城する場所と推定されます。

7) 西郭(第1郭)と北郭虎口の守り

①東郭から西郭に転じ、北郭虎口へ出る

②西郭は本丸西の守り。60mのほぼ正三角形で土塁、空堀が回る。

③北郭虎口=主郭部城前面の守り。意外と簡単な平虎口。横矢、空堀の屈曲。虎口の厳しい攻防と裏腹に美しい土塁、切り岸にみとれる。

*市教育委員会史蹟看板=虎口

城の出入り口は「虎(小)口」といいます。いざというときにすぐ閉鎖できるように、また敵が侵入しにくいように、できるだけ幅を狭くしています。城の防御と香華補記の両面において重要な場所であり、さまざまな工夫が加えられました。「横矢」という侵入しようとする敵に横から弓矢を射掛けるための構造や屈曲した堀などの「おりひずみ」とよばれる構造が見うけられます。茅ヶ崎城址では北側に推定する説がありますが、まだ発掘調査による確認がされていません。東郭南側にも虎口の存在が推定されている場所があります。

*市教育委員会史蹟看板=空堀

堀は水の有無によって水堀と空堀に分けられます。水堀は主に低地の城に作られ、堆積物で埋まりやすい難点があります。水がしみ通ってしまうローム層を基盤とする横浜の城では空堀が多く作られました。空堀は底が土でその形状は横断面が逆台形の「箱堀」が多く見られました。茅ヶ崎城址の堀は両側の壁が70度と垂直に近く、またローム層が堅いために取り付きにくく防御面で大変すぐれていました。

8) いったん根小屋側に回りセンター南駅へ

①堀切りからからめ手側に降り、根小屋と東郭虎口を遠望。

②センター南駅で解散。



以上



東郭



東郭から中郭の空堀



土橋



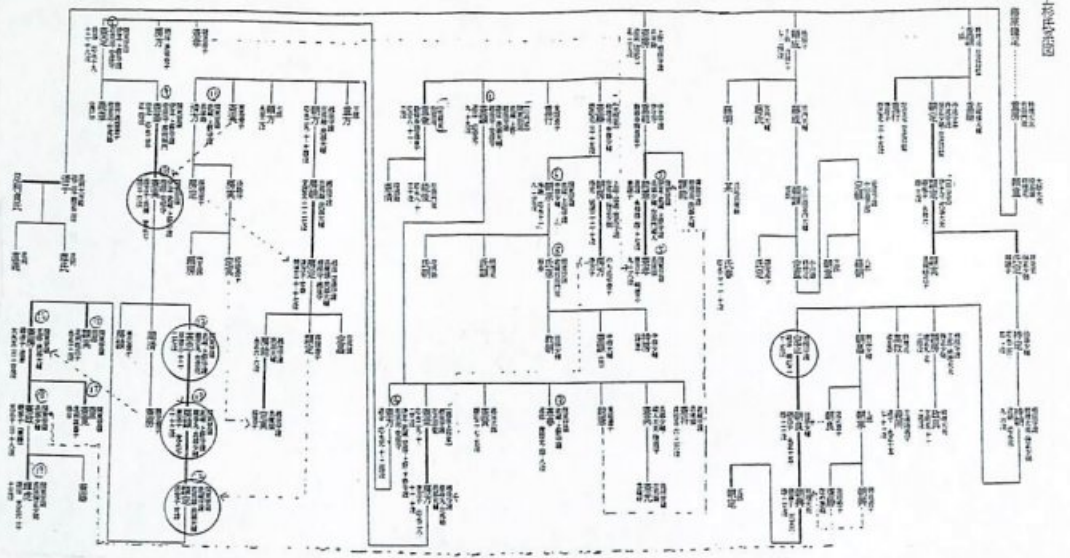
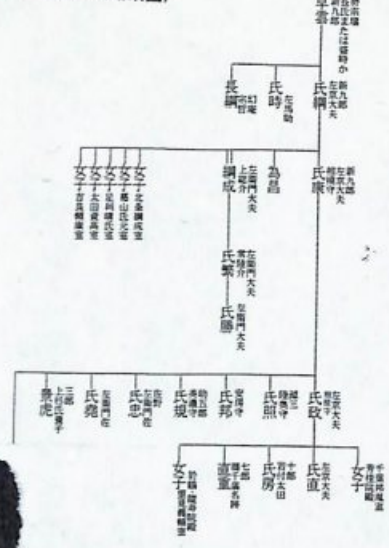
根小屋土橋



北郭、西郭の堀左道

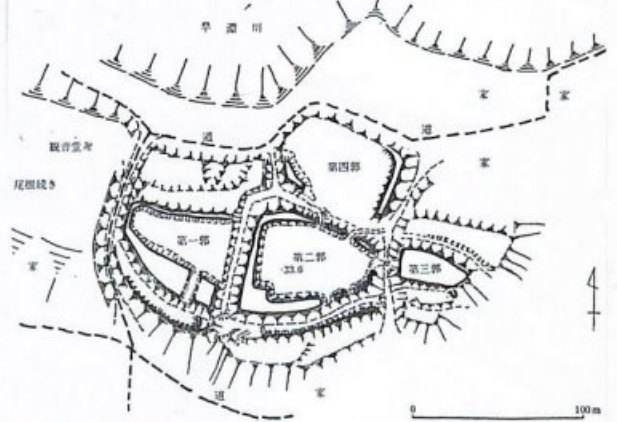


北郭虎口



茅ヶ崎城 72
茅ヶ崎城は、小机城から北へ約四、早瀬川の南岸に並行する字城山と呼ばれる丘陵の先端に位置する。城の前面北側は早瀬川が流れ、東は寿福寺の丘との間が、約一五〇mほどの谷状である。この谷は、城を東方より南方に巻いており、したがって城地は独立地形をなしている。(口絵42参照)
城地は、東西に三郭が並び、中央郭の北方に付属郭がある。西から順次第一郭、中央郭を第二郭、東方を第三郭、付属郭を第四郭とよぶことにする。第一郭は第二郭より郭幅が約五〇mほど狭く、第二郭は第三郭より二倍ほど広い。したがって第三郭が最も高く、第一郭が最も低く位置している。第四郭は第二郭から幅道を隔て、約一五〇m低い。第一郭と第二郭の間および第二郭と第三郭の間は、おおよそ一五〇mを有し、その深さも六・二m(土層二・一mを含む)から三・八mの規模である。
各郭の規模については、第一郭は、五八m×三五mのほぼ二等辺三角形で、第二郭は六六・五m×三七・〇mで東側やや狭くなった長方形である。第三郭は東端の角が落ちた長方形で、四三・三m×二〇mである。このうち土層が認められないのは第三郭のみで、破壊されたものか、本来、土層のない構造なのかは不明である。なお、この郭は土層敷に相当する郭の縁に近く、排水用の溝が開いてあるため、土層基部と錯覚しやすい。第二郭の土層は、ほぼ全周にわたって、特に保存状態のよい西側では、二二m×二・六mの規模の自然地形を残し、その上に高さ三・三m、幅八mの土層があり、内側は武者走りと思われる構造を示している。第三郭は土層で連絡されている。また第二郭の北東側には、土層が切れる形の単純な開口部がみられ、その先は東北方の郭と連絡する。さらにその西側北側にも別の開口部が存在し、これは第四郭西側の空堀に接続している。なお、この間に一か所開口部があるが、これは第二郭内を畑とする時のもので、土層は本来、連続していたと考えられる。
つぎに第一郭の土層は、西および北面にみられ、東側の第二郭土層に面する部分には土層はみられない。南面には幅一五m、高さ約一mの帯状の土層が存在する。土層の外側には幅三・四mほどの空堀がみられ、第四郭の土層は、東側に第二郭の土層にも匹敵する高さ二・五mほどの土層が構成されているが、北および北西縁には、それがなく、また、この郭の西側にも長さ二〇m以上高さ二・五mほどの土層が残存し、空堀をさらに深くしている。
ほかに第二郭の南、土層外側に幅三mほどの空堀があり、その外側は平坦部が認められる。第三郭の南に懸崖(または空堀)と、その外側に平坦部があり、同じく第三郭の北側斜面下に小規模な空堀とその外側に平坦部を持ち、これらは各郭が独立する以前の古い開拓の跡のように思われる。
この地域にみられる後北条氏の城は、ほかに小机城が著名であるが、空堀を比較すると、茅ヶ崎城は幅三三・三〇mの規模をもつ小机城のそれよりも、開口は第二郭にみられるように、単純に土層を切り、わずかに斜面だけの構造で、小机城にみられるような本格的な虎口または堀形に類する構造を持たない。
これらの点から、この城が小机城よりも明らかに時代をさかのぼる様式を備えており、あるいは小机城もこの形式をもっていたものと考えられる。
後北条氏は、その勢力圏が鶴見川流域から早瀬川へ北上する過程の中で、こうした支城群を築き、茅ヶ崎城もそのひとつとして利用されたと考えられる。このようにみると茅ヶ崎城は、後北条氏前期には完成され、その後あまり大きな改造を施されないうまま、今日まで遺構を残しているように思われ、時代例を知るうえでこの遺構は貴重である。

日本城郭大系 ④ 糸川

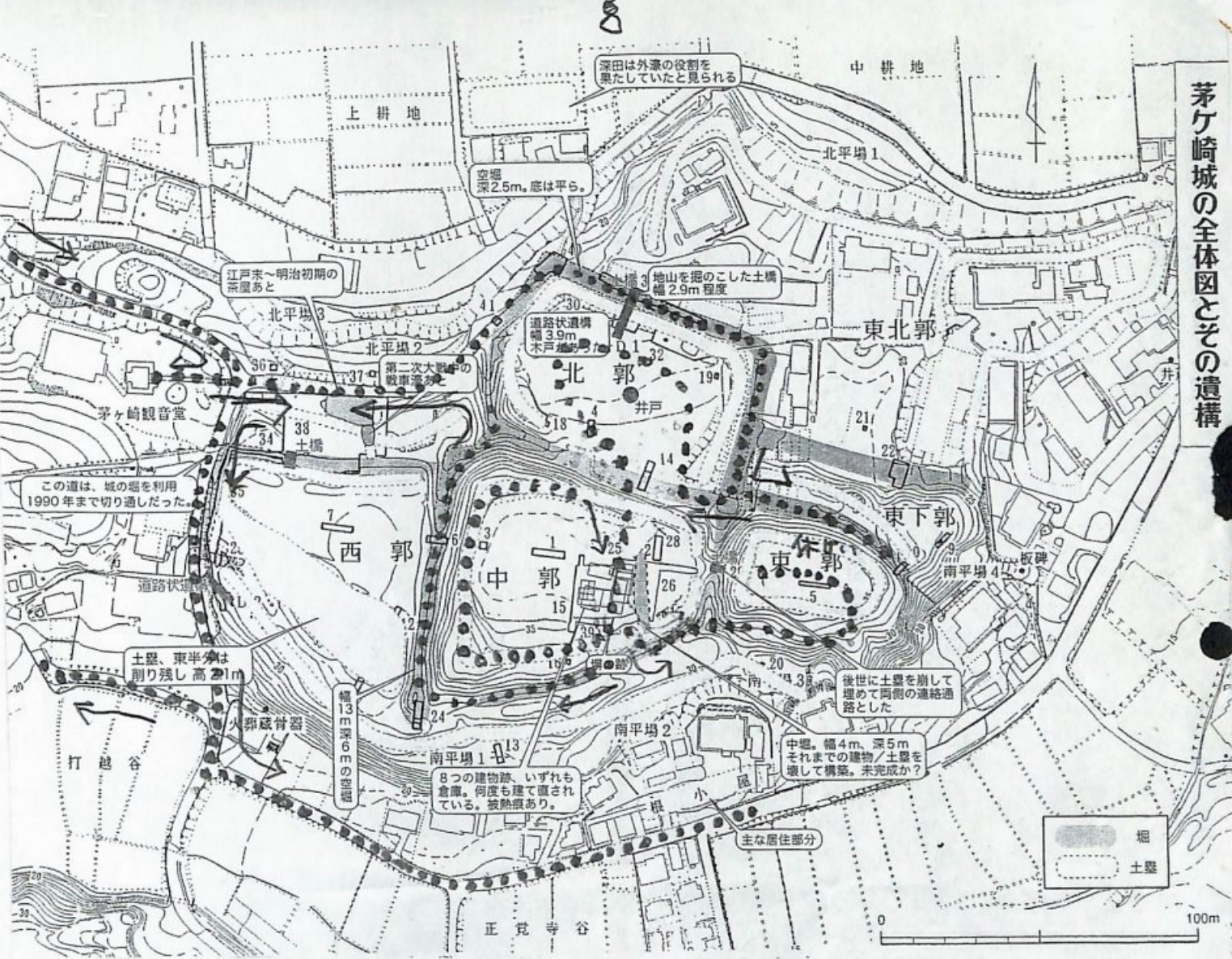


茅ヶ崎城跡 正統郭にはほぼ完全な形で残っている。

前回「バス見学会」の思い出 山中城

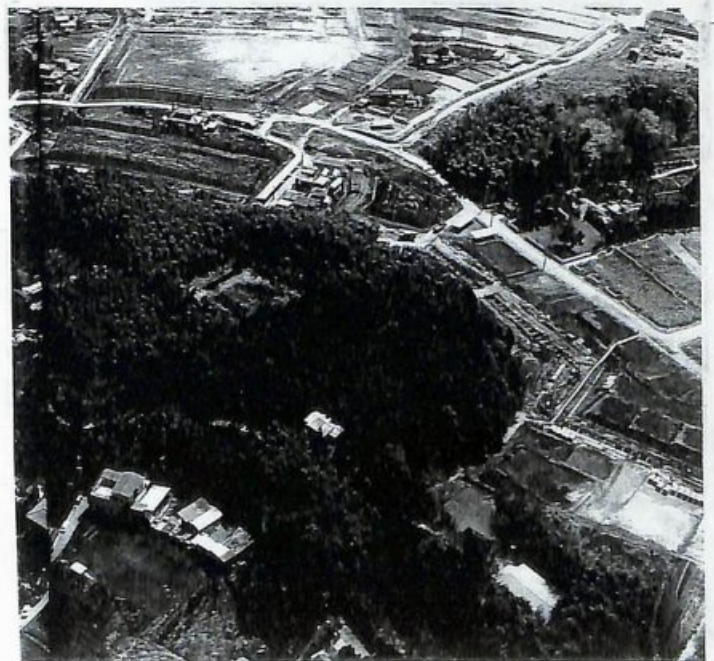


2012.11.14

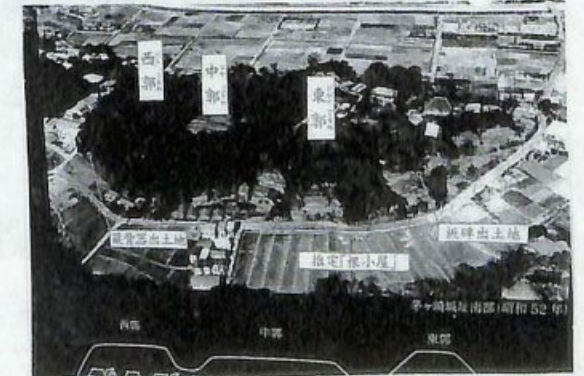


「茅ヶ崎城Ⅲ」(財団法人横浜市ふるさと歴史財団、2000年)所載の図2をもとに作成(使用する地図は2000年以前のもの)。数字は調査トレンチの番号

都筑区茅ヶ崎城跡と謎のウズマキかわらけ:平成二十二年度企画展「ウズマキかわらけの謎を解く-都筑区・茅ヶ崎城跡と南関東の中世城館」展覧会図録



茅ヶ崎城の発掘調査以前のようす (財団法人横浜市ふるさと歴史財団文化財センター写真提供)



説明看板にあり全録写真